

染められたオタク女
カリスマ、一ヒーバディのほう
男として優れていくのが
いるの♪

オマケノベル

この小説はあくまでも架空の物語であり現実とは一切関係がありません。また小説内で描写される行為を実際に行つた場合、ハートナーが傷ついたり、刑法上有りは民法上の罪に問われる可能性があります。また、この小説はあくまでも成人向けであり、未成年に閲覧させるべきではありません。

内容

四月: テニサーとの出合	4
音声第一部	
八月: 軽井沢: テニサーの夏合宿	32
音声第一部	
九月: キムラ先輩の「マニ力向上キャンプ」	56
音声第四部	
十一月: ゼイナのスペシャルベースボールティ	78
音声第五部	

四月：テニサーとの出会い

わたし中峰聖菜（なかみね せいな）はこの春から上京して東京の大学に進学します。一人暮らしは結構、心配だけど、田舎と違つて話が合う人もきっとたくさんいる。だろうし楽しみです。なんとかやつていける…よね？

大学初日、各サークルの激しい新歓活動にちょっと…というか、かなり引き気味。やっぱ都会の人ってエネルギー：すごいけど、ちょっとだけ怖いかな。そう思つてわたしは大学の正門の方は避けて裏門の方から出ようとしました。そこで少し小さなサークルが地味に勧誘しているのを見つけました。

『ゲーム研究会』『エフジア好きな人集まれ』とプリントアウトした紙を持つた数人の男の人が立っています。『エフジア』は最近流行っているスマホのオンラインゲームでわたしも好きなのですが田舎にはほとんどプレイしている人がいないのでもっぱら一人でネットの情報を見ながらプレイしていました。SNSもなんだか怖いし…。でもせっかく大学生になつて都会に出てきたんだから勇気を出すときかもしません。

「あ、あのー、その、ゲーム研究会つて…」

もう緊張して舌が思うように回りません。

「ひやあいっ、え、あのゲーム研究会はですね…」

でも話しかけた相手の方が同じぐらい緊張して噛み噛みだったので思わずお互
いに目を見合させて少しコミュニティ障同士のシン・パシーを感じます。そしてゲーム研
究会が基本的には放課後部室でエフジアをプレイするだけのゆるいサークルで夏
と冬のイベントに考察系の同人誌を持つていつていると知つてここならわたしで
もいけるかも…と思つてしまいます。

そしてそのままなんとなくなし崩し的にゲーム研究会 通称『ゲー研』の新歓
コンパに参加することになりました。

「えつと、あの、その…わたし、中峰聖菜といいます。えつと…英文科の1年生
です。その…今回は誘つてくださつてありがとうございます。…田舎から上京し
たばかりで、わからないこととか困つてることが多くて、あの…その…もしかし
たら先輩がたにご迷惑をかけちゃうかもしれないんですが…よろしくお願ひしま
す。

あの…わたしの地元では…同年代の人がほとんどいなかつたので、こんな風にリアルでゲームができるお友達を作るのが夢だつたんです。わたしもゲームスマホゲームですけど特にFGAが好きで、えつと…こんなにたくさんのがゲーム研究会の先輩たちと繋がれるなんて夢みたいです。高校時代とかはもう、好きなキャラをガチャで引き当てるためにアルバイトしたりしてですね。でもあんまりわかつてくれる人がいなくて、だから本当に嬉しいです。特に好きなキャラはギルさんで、でもでも周りでわかつてくれる人とかあんまりいなくて、今日は新歓ブースで声をかけてくださつたときから話が弾んじやつて、もしかしたらわたし興奮し過ぎでちょっと暴走気味かもしれないんですけど、嬉しくてできれば今後もずっとゲーム研究会で仲良くしていただければ本当に嬉しいなつて思います。

…あ、あのすみません。ちょっと話しあがめちゃいました。こんなに同じ趣味の人と出会うことが今まで出なかつたから興奮しちやつて」

顔から火が出るほど、というのはこういう状況でしようか。緊張しすぎて自分が何を言っているのかもわかりません。なんだか胸がドキドキして緊張のあまりふわふわとした気分になつてしまします。つというのも来てみてわかつたのです

が、ゲー研には女性の部員がわたししかいないのです。だからかゲー研のなかでも部長さんたちのような一部の部員しか話しかけて来ません。でも、わたしも何を話していいのかわからないのでおあいこです：たぶん。

でもお互いそんなコミュニケーション障な感じでも飲み会の席でスマホをあけてゲームしても大丈夫なゆるさは救いです。ゲーム用のゲー研のチャットで挨拶したらリアルよりもたくさんの人達が挨拶してくれました。

ちょっとぎこちないけれど、もう少しだけこのサークルで頑張つてみようかなと思いました。

その日、わたしは講義が終わってゲー研の部室に向かっていました。高校と違つて制服のない大学では服を選ぶのはいつも大変で、それでも大学生らしくしなきやと今日は薄手の白のワンピです。高校時代は美術部で喪女どうしでつるんでもいて暗めの地味な服ばかり着ていたんですが、東京の大学に進学したので少しは自分を変えなきやと一大決心して昔の服を全部捨てて東京で買い直しました。

そんな風にちょっとした大学デビューのつもりだったんですが、結局新歓の時期の大手サークルの強引な勧誘に引いてしまって、ゲー研に入ってしまったあたり我ながら変わりきれてないなとため息です。

「キミ、カワイイね」

そんな風にいきなり後ろから声をかけられたのです。振り向くとそこにはいかにもモデル体型なイケメンの男の人が何人か立っていました。

「え、わたしですか？」

そう思わず聞き返します。わたしの人生でいきなりこんな風に褒められたことがなかつたので心のなかで混乱してどうしていいかわからなくなってしまします。

「モチ！キミ以外に誰がいるのさ」

そう言つていきなり距離を詰められてしまいます。隣に立つてわたしよりもだいぶ高い身長から見下ろしてきます。先輩…なのかな？
「オレらさ、これから飲みに行こうって話してたんだけどさ。女子があんまり来られないみたいなんだよ。男ばっかじや寂しいんでキミみたいな可愛い女の子を

誘えないかなって話してたんだ。あ、もちろん飲み代とか足代は全部オレらが出すから気にしなくていいぜ」

「そう、声をかけてくれた男の人が言います。髪を明るく染めて、背が高くて鼻筋が通つていてまるで雑誌から抜け出てきたみたいです」

「そうそう、もてないオレらを助けると思って来てくれたらマジ嬉しいんだ」

反対側に最初の男の人とは別のもつとガツチリとして筋肉質な見るからにスボーツマンの男の人が立ちます。他にいたあとの男の人達もまるで行く手を遮るようにいつの間にかわたしの前に立っています。みんな最新のファッショングで走り歩いて、びっくりするぐらいカッコイイです。

わたしが密かにした大学デビューがやつと人に認められたことと今までの人生で一度もなかつたくらいハンサムな人たちに囲まれたことでわたしは少し調子に乗つてしまつていました。

「す、すみません、あの：わたしこれからサークルがありますから…」
ドキドキしながらそう言います。

「あちやー、振られちゃつたかー」

男の人達が爆笑します。

「キミ」年生でしょ？この時期は新歓期で人の出入りが激しいから一回くらい休んだつて大丈夫だよ」

誰かがそう言つて。みんなが口々にそうだそุดだと肯定します。『でも…』
と言いかけたわたしの言葉を遮るように最初に茶髪の男性がいいます。

「サークルには新入生が他にもいるけど、オレらにはキミしかいないんだ」
そうわたしの肩を掴んでまっすぐ目を見て言われます。最初に一瞬肩を抱き
寄せられたときはビクンと体を震わせてしまいましたが、まるで少女漫画みたいな
シチュエーションに胸がドキドキしてしまったのも否定できません。その茶髪
の先輩の服からはふわりといい香りがします。肩を掴まると男の人の大きな手
を意識してしまいます。

「えっと…わ わかりました。行きます」

拒絶するはずだったのにわたしの口から出てきた言葉は真反対でした。

「おー！」「よく言った！」「こんなカワイイ子と飲めるとか最高すぎんだ
ろ！」

などと肯定的な言葉が投げかけられて戸惑ってしまう。今までの人生で言われたカワイイを全部足したよりもたくさん既に言われてしまつた気がします。そのままその先輩達は大学の入口でタクシーを呼び止めるとい台に分譲して乗り込みました。タクシーはいつもゲー研が飲み会をする駅の方とは逆方向に向かいます。またこつちに引つ越してきたばかりのわたしはどこに向かっているのか少し不安でした。

「オレはキムラっていうんだ。これでも既に3年生なんだぜ。ちなみに周りからはキムつてよばれてる。仲良くしてくれよ!」

「先輩、見えないっすよ!」

などとまるで高校生のような会話を繰り広げている男子達。キムラ先輩は相変わらずわたしの肩を抱いたままです。

「キミの名前、教えてくれるかな」

「そう言う先輩。

「中峰聖菜つていいます」

「セイナちゃんかー。名前もすごい可愛いね。これから行くのはオレらの御用達のちよつと高めの居酒屋だからさ、楽しみにしててよ。そこらの新歓じやあ、駅前の安い飲み屋が普通だろ、これから行くところは全然ちげーからな」

「あ、あの先輩達って何のサークルなんですか」

うまく会話の流れについていけずになんとかそう聞きました。

「あ、オレら? テニスサークルだよ」

「ゲー研の先輩方にテニスサークルは危険だから近寄らないほうがいいとアドバイスされていたことを思い出します。」

「あー、セイナちゃん。なんか悪いこと考えたでしょ。オレらの人気に嫉妬して他のサークルでオレらの悪口が流れてるっぽいんだよね。そんなの気にしないでよ。オレら、ちょー紳士な集まりだから」

「そつすよ。オレら以上に紳士なサークルなんてウチの大学にないつすよ。あ、オレ経営学部1年のリヨータって言うんだ。セイナちゃんよろしくね」

そうさつきわたしの隣に立った筋肉質な男の人人が言います。

「ほら、うちのサークルはイケメンが多いから女の子が集中しちゃう傾向があるんだよね。だから他のサークルが女子を確保しようとして悪い噂を流すんですよ。つっても今日みたいに女子が全然都合つかないときもあるつすから言うほどでもないんですけどね」

「ウチのサークルの読モ率高すぎっからな」

「それ先輩が言うんすか？」

「バカヤロー、オレは読モじやなくて普通にモ델として働いてるわ」

「先輩ってモдельなんですか？」

「まつ、ただのバイトだけどね」

道理でカッコイイと思つてしまふ。普通に喋つているだけでも爽やかな先輩の顔立ちは魅力的で肩にかけられた手もいやらしい感じは全然なくて普通にエスコートしてくれている感じがする。

タクシーが停まつたさきはちょっとおしゃれを意識した隠れ家的なバーだつた。

「キム おつそいよ～」

そうお店の中に入ると声をかけられた。センパイっぽい女人でびっくりするぐらい美人。ちょっと露出多めの服を着ているけど、スタイルが良すぎて全然それが嫌味になつていない。おもわずため息が漏れるくらいきれいなセンパイだった。

「キム、この娘は?」

「あー、こっちに来る途中で拾つた子猫ちゃんさ。新入生のセイナちゃんだぜ」「ふふ、今晚のおかずね。

はじめましてー。あーしは経営学科三年のユウコつて言います。仲良くして
くれると嬉しいな」

そう言つてユウコ先輩がわたしの肩を掴んで抱き寄せます。さつきからこの人達ボディタッチ多すぎてわたしは緊張してほとんど喋れません。

「うわー、セイナちゃんスタイルいいねー。オツバイマジデカだー」

そういうつてユウコ先輩がムニムニと男の先輩たちの前でわたしの胸を揉みしだきます。

「んん・先輩、やつやめてください」

「いいじやんいいじやん、減るもんじやないし。女子同士だし」

そういうてユウコ先輩がセクハラしながらわたしを席に引っ張つていきました。どうやら今日のこの店は先輩たちが貸し切つてあるみたいです。

そして結構高そうな料理がコースで出てきて、みんなはしゃぎながら食べてきます。男子のノリがよくて、どんどん話が弾んでいきました。そして時々ついていけないわたしに対する配慮も忘れません。それにユウコ先輩もセクハラは多いけどいつもわたしから会話を引き出してくれて、気がつくとわたしはその空間をとても気持ちよく感じてしまつていました。

そして、途中でキムラ先輩がわたしのグラスにお酒を注ぎ始めます。はじめはお断りしようとしたのですが、今日ここに誘われた時みたいに気がつくと飲む流れになつてしましました。しかも途中から女子の先輩たちが合流してきて、やっぱり皆さんわたしのことを口々に褒めるんですから余計にネガティブなことを言いづらい感じになつてしまします。

結局、途中からわたしは注がれるがままにワインを飲んでしました。

「セイナちゃん、楽しい？」

そろそろ夜も更けてきたときに、そうキムラ先輩がわたしに聞きました。

「はいっ！たのしーです！」

お酒が入つてテンションが上つたわたしはその場のノリでそう答えます。

「オレらもセイナちゃんと飲めて超樂しーぜ。セイナちゃんテニサーに入らな
い？」

そう言いながら肩を抱いていたキムラ先輩の腕がおりてきてわたしの胸を触
り始めます。でも、わたしは酔っぱらつていい気分で、なんだかそれもどうでも
よく感じてしまつていたんです。それにさつきまでユウコ先輩がワシャワシャも
んでいたのでもう別に気にならなくなつてたのかもしれません。

「はい、入りますう！」

聞かれるがままに答えてしまつわたし。なんだかポカポカして気持ちい感じ
です。

「あー、こんなに酔つてたら入部届け書けねーな。よつし、代わりに動画で記録
しちゃか」

「もー、しんじてぐだしやいよお。はいるつたらはいるんですけどう」

「ああ、信じてるぜ。ほらこっち向いて。学籍番号、フルネーム、それからスリーサイズを言つて、テニサーに入りますつて言つてよ」

リヨータ先輩がスマホのカメラをこっちに向けていいます。いつの間にか人数が増えていて10人近い男女がみんなこっちを見ています。ふらふらで気持ちいいのに任せてわたしはキムラ先輩に胸を揉まれながらテンションに任せて言う。

「が、がくしえきばんごう、18765、なかみねえ、しえいなでーす。すりーサいざはあ、上からはちじゅーに、ろくじゅー、はちじゅーさんでーす。テニサーー入部希望でーす。みんなーよろしくねー」

「オッケーこれで証拠画像ゲット。セイナちゃんちょっと酔い過ぎてつからそろそろ帰ろつか」

そうキムラ先輩が言います。

「ええ、わたしさまだだいじょーぶですよ、いえーい！」

楽しい雰囲気に流されて普段のわたしならありえないくらいテンションが変に高くなつて、そう言つわたしのことを抱きしめてキムラ先輩が爽やかな顔でわたしを見つめていいます。

「オレが送つていくからさ。許してよ」

「もー、しえんぱいが送つてくれるんだつたらしかたないですなー」

イケメンの先輩に抱えられながらわたしはタクシーに連れて行かれます。

移動中いつの間にか寝てしまつていたようで気がつくとわたしは知らないべッドの上にいました。先輩達と目が合います。みんなニヤニヤわたしを見下ろしています。

「大丈夫？ 酔いが覚めた」

キムラ先輩がそう聞きます。

「はい、えつと…大丈夫です」

なんだかぼやつとした頭でそう答えます。

次の瞬間下半身で感じたことのない感覚が起こります。

「ヒヤーンっ」

思わず声が出てしまいます。

「セイナちゃんのこっちももう大丈夫だよー」

そういうのはユウコ先輩でした。意識がはつきりした瞬間、自分の姿を見たわたしは衝撃を受けます。なんとわたしは服を脱がされてテニサーの男の人達に見下ろされていました。しかもユウコ先輩がゆっくりとわたしの恥ずかしい場所を舐めていて、そのたびに穏やかな快感が下半身から登ってくるのです。

「えっ…」

思わず絶句したわたしに向かってキムラ先輩が言います。

「あー、気づいたやつたか。セイナちゃんって鈍い方でしょ。まつオレらはそつちのほうがいいけどね」

頭の中がパニックで何を言えばいいかもわかりません。反射的に逃げようとします。

「へへへ、どこに行くのよ？それにセイナちゃんのここは鈍くないよ。つてか超敏感だしい」

そういうてクチュクチュと音を立ててユウコ先輩がわたしのお豆をクリクリと舌先で潰します。

「ヒヤアンつ！」

声が無意識に出てします。

「や、やめてください」

逃げようとしてもユウコ先輩がわたしの足を掴んでいて逃げられません。

「いい感じだし、はじめつか。『テニサー新歓合宿』の人目。田舎から出てきた上京女子中峰聖菜ちゃん編』あ、カメラ目線よろしく。ピースとかしてくれよ」リョータ先輩がカメラを持ってわたしの前に来ます。

「やめてください！撮らないでください！」

必死でわたしは叫びました。

「セイナちゃんちょっとノリ悪くね？ほら、せつかくオレの部屋で一次会会宅飲み、つてかパコ飲みなんだから飲みなよ！よくなるまでこれでも咥えててよ」叫んでいたわたしの口に布が押し込まれます。そしてキムラ先輩の大きな手がわたしの両手首を捉えます。

手を掴まれてユウコ先輩に足を掴まれているわたしは抵抗できません。「セイナちゃんのノリが良くなるように誰かウォツカ取つてよ」

キムラ先輩がそう言います。

わたしの口に押し込まれた布にキムラ先輩が強いお酒を垂らしていきます。呑みたくないのに布のせいで口が閉じられませんし、お酒はどんどん布にしみでいきます。辛いお酒の味が舌いっぱいに広がってしまいます。

「おつけーおつけー。じゃあセイナ、暴れていいぜ。オマエが暴れれば暴れるほど酒が回つていい感じになるからな。

んじや、オレがセイナの初めての男になっちゃいます!」

軽いノリでそんな恐ろしいことが宣告されてしまします。先輩の大きくて重い体がわたしの上にのしかかってきます。一生懸命もがいているのにそんなの関係ないかのように熱い汚らわしいものがわたしの割れ目にあてがわれます。

「キム、オーライ、オーライ。そのままおろしてつてセイナちゃんのピッタリと閉じた処女マンにいつちやうよー!」

ユウコ先輩の指がわたしの下半身に相変わらずあてがわれているのを感じます。キムラ先輩の男性器を誘導しているみたいで。

ゆっくりとキムラ先輩の体の一部が侵入して来るのを感じます。恐怖に思わず目をぎゅっと閉じてしまいますが、状況が変わるはずがありません。

「セイナのヴァージン感じるぜ。オレラのためにとつといてくれてありがどくな」

キムラ先輩が酷いことをしているのに優しい声でそういういます。わたしはもう首を横に振つて拒絶する以外できませんでした。

「んじや、いただきまーす」

次の瞬間痛みが走ります。痛みからもがいても逞しいキムラ先輩にはかなうはゞもなく組み伏せられた体勢のまま我慢することになつてしまします。「ほら、ゆっくりならしてやるからさ。力抜けよ。つてかまた酔つてるよな。セイナちゃんお酒弱いね。カワイイよ」

歯の浮くような言葉。でもその通りわたしの体はなんだかふわふわして力が入りません。そしてそのせいで痛みも…。

「あー、セイナの中いいわ。今週3人目の新入生だけど一番セイナが気持ちいいわ。おっぱいもでけえし。今年の新入生女子で一番いいぜ」

そんな酷いことを言いながら先輩がわたしの体にキスの雨を降らせます。

お酒のせいで力が抜けて抵抗できないわたしを押し倒したくせに…。そしてゆっくりと先輩の腰使いが激しくなってきます。力の抜けたわたしの腰をベッドに叩きつけるみたいに。パンッ。パンッと腰が打ち込まれ、徐々に痛かっただけなのが熱くなってきます。全身が火照って切なくなってしまします。ダメなのに…こんなに無理やりされてダメなのに…。それなのに痒いような快感を感じ始めている自分が嫌になります。

「おお、気持ちよくなつてきてるんだなセイナ？顔に出てるぜ」

そうキムラ先輩がその整った顔でいいます。わたしは認めたくなくて顔をそむけてしまいます。

「おお、いまキュッてしまつたわ。セイナはコミュ力低くてもセイナのマンコはマジコミュ力高いぜーもつともつと気持ちよくなりたいってオレにラブラブ吸い付いてきてるぜ！」

そ、そんなの嘘。それなのに確かにわたしはどんどん気持ちよくされていつてしまふのを感じてしまいます。お酒のまわりきつたぼうとした頭に下半身から湧き上がるはじめての感覚が沁みてきます。

「じゃあオレラテニサーのコミュ力をセイナに教えてやらなきやな。ユウコ、パンツ吐き出させてやれ」

「ふふ、セイナちゃんもうエロエロな感じだつて分かつてる?」

ユウコ先輩がわたしの口の中に押し込まれていた布を取り出します。なんどそれはわたしの下着たつたのです。

口から異物を出され、新鮮な空気が吸えます。でもそれと同時にわたしに覆いかぶさっているキムラ先輩の汗やいやらしい匂いがまるで液体みたいな濃密さで感じられます。

「ああ…ひやああんんつ…ああああん!」

溢れ出てしまふわたしのはずかしい声。

「セイナは感じていらないんだよな?」

そうあてつけに言いながらキムラ先輩が激しく腰を振り下ろします。その瞬間電流のよう快感が全身を走つて声が勝手に出でてしまいます。

「ひやああいい、感じてえ・あああんませんんっ！」

「ああ、かわいいぜ、セイナ。マンコのほうはこんなに正直なのにな」

「そういってまるでえぐるかのようわたしの体をベッドに押し付けて、ぐつと深くわたしの体の奥深くまでずんずんと貫いてきます。まるでキムラ先輩の男性器の形がわかるほどにゆっくりと深く押し付けられてわたしはぼやつとした快感を埋め込まれてしまいます。

「キス」

「そうキムラ先輩が優しく言つたときにはわたしはほとんど本能的に自らキムラ先輩の唇に自分の唇を重ね合わせてしましました。今まさにわたしを騙してレップした最低の先輩なのに…。」

わたしの唇をチュウッと吸つてそのままキムラ先輩の舌がわたしの中にレロレロっと入つてきます。上と下の口でキムラ先輩に侵入されてわたしはもうなにがなんだかわからなくなつてしまします。

チュップ、チューパッチャユツルルルと甘く、時間をかけてゆっくりとわたしの中に侵入してきたキムラ先輩の男性器がわたしの拒絶の皮を一枚ずつ剥ぎ取つて、気持ちいいと感じている動物的な一匹のメスでしかない恥ずかしいわたしだけにしていいつてしまします。

その間もキムラ先輩の男の部分はずつ。ふりとわたしの中に打ち込まれ、まるで体の内側からよしよしするようにわたしのはずかしい一番奥をなでているのです。

そしてキスをしながらゆっくりとキムラ先輩のモノがでていくのを感じます。こんなに長かつたんだと思えるほどにわたしのヒダヒダがキムラ先輩のものが出かかる数秒間刺激され続けます。そして次に感じたのは寂しさでした。熱くて太くて長いその部分が出ていった場所に。ポツカリと空いてしまつた空洞。まるでわたしの寂しさを強調するように絡みつくキムラ先輩の扇情的な舌使い。

しかもその舌さえもゆっくりとわたしの中から出ていこうとしています。オ

ンナのわたしとしての寂しさを感じてしまいます。

「なんだ、セイナ、物欲しそうに…」

「そうキムラ先輩が言います。わたしを騙した卑怯な最低の男の人。それなのに、それなのに心の何処かで求めてしまっているわたしがいます。次の瞬間、わたしの中から抜かれてしまったキムラ先輩のものが一気に深く叩きつけられます。

「ひやアアアアンンンンんん！」

取り繕う隙もなく、わたしの声が漏れてしまいます。

「あああんん！はあ…はあんん！…ふあああん…しゅごいいい、しゅごいいい！ひやああんん、かんがえられなくなつてましゅうう！」

一気に責められてわたしはもう耐えられなくなつてしまします。

「ふふ、セイナちゃんのスケベ顔イイネ。考えなくていいのよ。メスはオスに支配されてればいいの」

「そうユウコ先輩がわたしの顔をスマホでパシャパシャ撮りながら言います。わたしはそれに反応することもできず、ただただキムラ先輩の腰使いに体を預けてしまいます。

「ひやあつ…あああんんつはあ…ふああんん！しゅごいい…な なんかあ…熱いの熱いのクルクルクルうううう！」

「おおお、セイナのマンコが痙攣してきてるうう。やべええ、これよすぎる」「ひやあああんんん熱いのキテるうううううう」

部屋いっぱいにわたしのエッチな叫び声がこだまします。今まで感じたことのないほどの気持ちよさに包まれて全身が脱力してしまいます。お酒だけでなくてジンジンと続いた絶頂の虚脱感にうちのめされて、先輩の汗の染み込んだベッドにそのまま体を横たえています。

ゆっくりと先輩のものがわたしのなから抜き出されるのを感じます。先輩の太いものがなくなつた場所に入つてくる外気を感じて少しだけ寂しくなつてします。

ベチャツとわたしのお腹に滑つた熱いものが置かれます。目を上げてみればわたしのお腹の上に先輩の使つたコンドームが無造作に置かれていて、白い男の人の匂いを漂わせるものが垂れています。

「おいお前ら、撮影すつぞ。セイナの処女喪失記念だ」

「そうキムラ先輩が言つて先輩たちが詰まつてきてわたしを取り囲みます。

「セイナちゃん、処女喪失おめでとう」

「これでセイナも大人じやん」

「もつとガンガンせめて行こーぜ、イエえい！」

「そう口々にわたしが処女じやくなつたことを先輩たちが褒めます。
「おら、撮影すつぞ。次のエッチでセイナの男性経験は？」

「「「にー」」」

「酷い掛け声とともにみんなビースして笑顔でわたしの裸の写真を撮影されてしまします。

「そんじや、これはうちのサークルの裏チャットにシェアしとくわ。次はリヨータだつけ？」
「うつす。

「じやあセイナちゃんよろしく！」

「そういうてりヨウタ先輩がわたしにのしかかつてきました。体育会系の大きな体の下でわたしは抵抗できません。

翌日、異臭で目が覚めると、見たことのない部屋にはじめ戸惑いました。そして起き上がった時に自分が何も着ておらず、更にわたしのまくらの周りにこれ見よがしに捨てられた大量の使用済みコンドームに気が付きびっくりしました。嗅ぎ慣れない匂いはそこから出ていた男の人の生臭い臭いでした。

呆然として目の前が真っ暗になったようなショックを受けて思わずフリーズしてしまったわたしの隣で「ごそごそ」音がします。そこにはやはり裸のユウコ先輩が寝ていたのです。

「おはよー、セイナちゃん。

昨日は激しかったよね。うわあ、何このゴムの飛び散った部屋。あいつら片付けずに帰つてつたなー。

大丈夫?セイナちゃん?泣いちゃつてるの?

おおよしよし、向こうにお風呂があるから体を綺麗にしてきなよ!」

そうユウコ先輩が元気つけるように優しく薦めてくださいます。シャワーを浴びようとして、着てきた下着がないことに気が付きました。

「これ、使つて」

そういうつてユウコ先輩がかなりセクシーな未使用のブランド物の下着を差し入れてくださいました。

そしてわたしがシャワーから出てもなお残る下半身の違和感を気にしつづきちゃんと身だしなみを整える頃にはユウコ先輩が部屋の掃除を終えてきれいになつていました。

「じゃあ、ランチでもいこつか?」

セイナちゃんのロストヴァージンのお祝いだし、あーしがおこつちゃうぞ!」

そう大人っぽい顔立ちのユウコ先輩がニコッと笑つていいます。わたしは今の大大学で最初に出会つた女の子の先輩としてユウコ先輩にすがりたい思いがします。

「ロストヴァージンのお祝い…?」

それでもユウコ先輩にも不信感がないわけではありません。昨日からずっとキムラ先輩のフォローをし続けていたユウコ先輩。

「そつ、今時厨房のうちにヴァージンなんて捨ててるもんっしょ。セイナちゃんがいまだにもつてたなんて驚きだし、そんなの邪魔なだけじゃん。もう大人なんだよ? 男女のコミュニケーションはべちゃくちゃおしゃべりするだけじゃないつしょ」

涼しい声でそういうユウコ先輩。そこでわたしはわかつてしましました。多分ユウコ先輩がずるいんじやなくてきっと都会ではそれが普通なんだということに。きっとわたしが田舎者過ぎてコミュ障すぎるだけなんです。

八月・軽井沢・テニサーの夏合宿で…

それから気がつけば夏になつていきました。わたしは結局テニサーとゲー研を兼サーすることになりましたが、ゲー研のみんなにはテニサーに入つたことは言えずじまいです。なんだか後ろめたいというか裏切つちやつたような気がしてしまつたからです。

テニサーの先輩たち、特にキムラ先輩にはあれからも良くしてもらつていま
す。はじめはすこし脅しも入つていましたが、結局わたしがテニサーの部員とし
て活動をきちんとし始めたことでみんな優しくなりました。それでも都会のエッ
チな習慣には慣れませんが…。

でも、テニサーにいると会話の気まずさとかがなくて気楽なのも本当です。
ゲー研の方はオンラインでチャットしているときは普通なのに、部室で顔を会わ
せると未だに気まずさが残つていてどう会話をすればいいかわからない微妙な距
離感のままなんです。

そして夏休み。ゲー研は毎年夏の間にゲームの統計データをまとめて取るた
めの合宿をするみたいです。でも男子ばかりの合宿にわたしが行つても気まず
いだけではないでしょうか。だからわたしはゲー研の夏合宿にはいかないと決め
ました。表向きは実家に帰るからということにして。

その直後でした。テニサーの方から夏合宿に誘われたのは。もちろんゲー研
の夏合宿も断りましたし、こっちの合宿もお断りするつもりでした。でもユウコ
先輩に出たほうがいいよつと薦められたり、キムラ先輩に出なかつたら写真をば

らまくというようなことを暗にほのめかされたりしたら断れません。結局わたしは「泊」日のテニサーの夏合宿に参加することになりました。

夏合宿当日。キムラ先輩が話しかけてきてゲー研のみんなに何か聞かれたときのための言い訳を教えてくれました。嘘を嘘で重ねたままかせ。でも、その頃にはもうキムラ先輩に言われたことは素直に受け入れる癖がついてしまっていたのです。だつてそうしないと脅されたり、怒られたり、辱められるから。

そういうわけでわたしはキムラ先輩に言われたことには素直に従う習慣がついてしまいました。たとえば合宿中はみんな女子は水着で生活するように指示されましたが、それがサークルの伝統だと言わると逆らえません。そして予想できただけですが、テニ・サーの夏合宿と行つてもテニスをするのは午前中だけで午後からは海に行つて夜はエッチなバーティーをする毎日でした。

そんな夏合宿の最中、キムラ先輩が言いました。

「そういうや、セイナの兼サーしてると、なんつったつけ? オタクがわらわら集まつてるキモいと」。あんなとこでも夏合宿あつたんだろ」「え? ……はい」

嫌な話題が振られたと思いました。というのもたまたま合宿の日程が二つのサーケルで重なっていたからです。

「つで、セイナは行かなかつたつてわけだ。オレラとのパコハメ合宿のほうがそりやあ楽しいもんな」

そう笑いながらいうキムラ先輩の声を聞きながら罪悪感で胸がキュッとになりますがうつむき加減で答えます。

「…はい」

「うは、マジで！んじや、挨拶しないとな。『セイナはテニサー優先してパコハメしまくつてます。ゴメンネー童貞くん達』つて謝んなきやいけないじyan。よしつ決めた。今すぐ電話しろ」

そんな酷い思いつきを決めたキムラ先輩がわたしのハンドバックをゴソゴソあさつて携帯を出してしまいます。

（ボイスドラマ第2章）

そして先輩にセクハラされながらゲー研に電話して、その後ハメられてしまつて息も絶え絶えなわたしにキムラ先輩がいいます。

「セイナもだいぶオレラのノリに慣れてきたじやん。つつーわけで夏デビューしよーぜ！」

絶頂して息が整わないわたしにキムラ先輩がそういうて頭をなでてくれます。なんだかわたしを認めてくれた気がして思わず嬉しくなっちゃいます。そしてキムラ先輩にささやかれるままに先輩の命令に従つて準備します。

ロツジのリビングルームには10人ぐらいのテニサーの男女がいます。男子は6人でみんなイケメンのセンパイたちです。女子は3人が一年生で引率代わりにユウコ先輩がきています。女子は一年生の中でコミュ力低めの女子が多いです。わたし達がリビングルームに入るとテニサーの男子のセンパイたちが口々に文句を言います。

「おせーよ、キム！お前だけ抜け駆けしてんじゃねーよ！」

「わーつてるつて！つーわけで今日から合宿一日目、本格的に遊ぶわけだが、半日外遊びして夜にパコハメするだけでお前ら満足かあ？」

キムラ先輩が煽ります。

多數派の男子のセンパイたちがブーイングを飛ばします。

「そこで、セイナからオレラに提案があるみたいだぜ。ほら、言ってやれ」
キムラ先輩が言つて、わたしの手の甲を持ち上げます。そこにはキムラ先輩が書いたわたしの言うべきことがメモしてあります。

全員の視点がわたしに集中します。何を言うのか興味津々な感じです。男子の視線は特にさつき出されたわたしの胸のザーメンに集中してしまいます。すごく恥ずかしくて、もじもじ内股で固まってしまいます。

「ほら、言ってやれよ。セイナの覚悟を見せてやれよ！」

力強くキムラ先輩がわたしにささやきます。

「えっと…その、先輩方、わたし達女子の水着姿で挑発してしまつて…ごめんなさい…。でも、これからは…我慢しないで…大丈夫です。わたしは、先輩方の性処理を絶対に…断りません。その…フリーマンコ宣言します…」

尻すぼみで恐る恐る私はいました。

「おお、よく言つたーさすがオレラテニサーのメス部員だわ！」

「そー、そー、はじめは怖いけど一步踏み出すのが大切だし
ユウコ先輩を始めとする先輩方が褒めてくださいます。

「ほら、他の一年生達はセイナちゃんの覚悟を見て何も思わないわけ?・セイナちゃん勇気を振り絞つて言つてくれたのにさ」

「そりヨータ先輩が言つて促します。すると他の一年生女子もみんな手を上げて立候補します。みんな気持ち的には不安なのに先輩たちの機嫌を取らないといけないから…。」

全員がフリーマンコ宣言をして最後にマーカーでお互いのお腹に『フリーマンコ♡』と書き合います。私服は初日に先輩たちに没収されてしまつていて水着以外ないわたしたちは隠れることももちろんできません。そして最後にユウコ先輩が口を開きます。

「つてわけで合宿残りはつと女子のオマンコ。パコハメオッケーだから。よろしくね。つてか昨日の夜もやりまくつたのに男子全員おつきくしてんじやん。男子は水着禁止、すぐに使えるマンコがあるんだから勃起したらすぐわかるようにしよー!」

ユウコ先輩が楽しそうに明るく言つて、隣りにいたキムラ先輩の水泳パンツに指をかけて一気に引き下ろします。その瞬間女子全員の視線がキムラ先輩の股間に注がれます。ついさっきまでわたしの中に入っていた肉棒がぼろんと露出します。すごい…あんなに太かつたんだ…たぶん女子全員がそう思つたと思います。つづいて他の先輩方が全員全裸になります。筋肉質でスタイルのいい先輩たちの裸が夏の日差しに照らされててかてか光つて、そしてその下半身にそびえる勃起したモノにどうしても目が行ってしまいます。

「じゃあ、これからずっとパコハメするんだしい、女子も気持ちよくなりたいつしょ？これからみんなで輪になつて性感帯チエックしよー！」

あ、キムとパコハメ抜け駆けしてきたセイナちゃんは罰としてリヨータの膝の上に座るつてことでヨロシク！

ユウコ先輩がまた楽しそうにいいます。一年生女子はお互いに顔を見合わせますがだれもいやとは言えません。というかこの空気の中でそんなの言えるはずがありません。

「おお、セイナちゃん、一緒にすわろーぜ」

そういふ年生のリヨーダ先輩が近寄ってきます。もともと体育会系でこのサークルで一番筋肉がムキムキのちょっと怖い先輩です。その人がわたしのことを抱きしめて座らせます。丸太みたいなガツチリした腕がわたしのお腹を抱きしめています。そして全員が男女が交合になつて車座に座つた上で、私だけリヨーダ先輩に抱きすくめられてしまつています。

「つてか、この合宿の一年女子はさ、みんなこの前まで処女だつたじやん。まだ自分の体のことわかつてないつてあーしは思うわけよ！つてわけでこの合宿を通じてみんながもつと自分の体のエッチな部分に気がつけたらもつとエッチが楽しくなるじやん。つづーわけでえ、これからみんな性感帯を発表してほしーと思いまーす！」

そうユウコ先輩がノリノリで隣りに座つている男の先輩のオチンチンをくりくり弄りながら言つてゐる間も、リヨーダ先輩は私のお腹を抱きしめてお尻に太いものをグリグリと押し付けてきます。

「つつつてもまだみんなわかんないつて思うのでー、まずあーしからいきまーす。つてか、せつからくだから男子は隣の女子にやつてあげてよ。つで、女子の方

は気持ちよかつたら愛撫してくれた男子のチンポを軽くシコシコしてやつてよ。きもちよかつたでーす、もつとしてくださいーいってね。わかつたら女子は男子のチンポ握つて』

ニコニコしながらユウコ先輩が卑猥な命令を下します。男子もみんな楽しそうだし、一年生女子は伏し目がちになりながらも隣の男子の男性器をにぎつてしまします。というか、伏し目がちになったその視線の先にキムラ先輩の太くて熱い脈動するモノがあります。それをわたしも恐る恐る握ります。さっきまでわたしの中に入っていたそれはきれいになつてているわけでもなくてどろどろしたもののが指に絡みつきました。

しかもそれと同時にわたしを抱きしめているリョータ先輩が『オレのことも忘れんじやねーぞ』っと耳元でささやきながらわたしのお尻に熱いものを押し付けてくるのです。

「みんな男子のチンポをよしよしできるようになつたっぽいかな?じゃあますね、みんなが気づいてなさそうな性感帯ってことで、耳をいじつてみよー!ま

「 ずは耳に息を吹きかけてえ、はんつ、そのあとにい舐めてあげてええ・んん

そういうユウコ先輩自身もすぐに隣りにいた男子に言われた箇所を責められて、甘い吐息を吐き出します。

そしてすぐに私も両耳からリヨーダ先輩とキムラ先輩が甘く息を吹きかけてきます。ゾワゾワゾワツと全身が逆立つような今までにない感覚、そして耳たぶをキムラ先輩が甘噛みします。

「はあんつ…」

思わず反射的に甘い声がでてしまいます。

「ふふ、セイナかわいいぜ」

そう、反対側の耳からリヨーダ先輩が囁いてペロッと耳をなめます。両側から耳を舐められて、軽薄な愛の言葉が囁かれます。軽薄だつてわかってるのにドキドキしちゃつて困ります。

「ふふ、感じたかな、感じたら男子のオチンポをよしよししてあげてね。こんなふうにしーこしこつて」

いたずらっぽくユウコ先輩が一回だけ震えている男子のおちんちんをなでます。わたしも手の中で熱く自己主張しているキムラ先輩のオチンチンを優しくしごきあげてあげます。嬉しそうに先走り液を垂らすそれに少しだけ可愛いと感じながら。

「セイナちゃん。オレにもしてよ。お尻でチンポよしよしくれよ」

「リョータ、お前ほんとケツ好きだな」

「当然です。女子の価値は尻の形で決まるっすから、ああ、そこのいい。セイナちゃんのお尻マジパないっす」

先輩同士がそんな他愛もないお話をしているのを無視して言われたとおりお尻でしごいてあげると、気持ちよさそうに水着越しにリョータ先輩の長いものが先走り液を出しているのを感じてしまいます。

「ふふ、じやあ次はセイナちゃん。言つてみよつか、イケメン一人に玩具にされてまじめまじめしいセイナちゃんの気持ちいい場所をみんなにおしえてー！」

いきなりユウコ先輩に振られて頭が真っ白になります。そしてこれから私が言った場所がこの後愛撫の対象になると思うと、いけないのにゾクゾクしてしまいます。まるでわたしもエッチな人になっちゃったみたいです。

「えっと、あの…ち、乳首とか…」

そういった次の瞬間、両側からキムラ先輩とリヨータ先輩の大きな手がわたしの胸を掴みます。そしてわしわしとわたしのおっぱいを揉みしだきながら耳元でキムラ先輩がささやきます。

「やっぱ女はチチだろ。セイナのデカチチ、マジ好きだわ。このデカチチもつとオレが育ててやつから」

そう言つてキムラ先輩の手が水着の中に入つてきます。乳首が慣れた手付きでぐにぐにと愛撫されるそのたびにじわじわ上がつてくる快感に体が震えてしまいます。そして体が震えるとお尻に押し付けられているオチンチンがグニグニと先走りをわたしのお尻にひろげて、わたしの手が無意識にキムラ先輩のおちんちんをなでてしまします。

その後も他の女子達がみんなおつかなびつくりで感じる場所を紹介します。でも、みんな嫌な顔はしてるけど、よく見るとその場所をいじつてもらえることにドキドキしている恥ずかしい表情です。

脇を舐められたり、おへそを弄られたり、たっぷり愛撫されたわたしたちは全員発表し終わる頃にはすっかり発情させられてドキドキしてしまつていきました。「どうだつたかな、んふう、今まで知らなかつた気持ちい」ところ見つかったつしょ？じやあ…はあは…みんなのフリーマンコがどんな感じかチェックしてつもらおー！じよつ、女子はあ、みんな水着をずらしてオマンコくばあてしてみせよう。でえ、男子はそんな可愛いあーしら女子のトロトロおまんこにい、…んふう…ガチガチマジ勃起チンポを当てて発情具合をチンポチエックヨロ♡つで、女子はせつかだからできるだけ可愛く『フリーマンコだよ』ってアピつてみよつか…ふはあ」

ユウコ先輩自身がすっかり出来上がつた感じで、そうエッチに指示しながら見せつけるようにお股を開いた体勢で派手な赤い水着をずらして恥ずかしい場所を開きます。そしてその上に先輩の男子が覆いかぶさります。

「キム先輩！オレいいっすか？」

「しかたねーな、リョータが先でいいわ。セイナちゃんの口はオレが使うわ」
そう言うとわたしの後ろにいたリョータ先輩が前に来ます。さっきまでわたしの
お尻に押し付けられていたリョータ先輩の大きなものが見せつけられるように眼
の前に突きつけられます。

「セイナ、ポーズ」

キム先輩が隣でささやくとわたしは反射的にさつきユウコ先輩がしたように白い
水着を指でずらして恥ずかしいポーズを取ってしまいます。

ニヤニヤしているリョータ先輩のスマホから、当然のようにカシヤつとシャ
ツタ一音がしています。

「これで来年も新歓ハッチリっすね」

「あとでシェアしとけよ。可愛い女子を集めるにはイケメンの男子を集めるのが
重要だからな。オレラの部員のエロ写真裏新歓用にまとめとけ」
「うつす」

そんな会話が聞こえます。周りを見れば他の男子達にも写真を取られちゃつて
るみたいです。いまさらですが、こんなのどうしていいのかわかりません。

「先輩、あの…ど、どういうことですか」

キムラ先輩に尋ねます。

「セイナ、台詞が違うだろ? ってカリヨーダに言えよ。ホラ可愛くな。新入生は
テクがないぶん可愛げマジ大事。ホラ気合い入れて」

「そつすよ、セイナちゃんはなんなんだつけ?」

ニコニコいやらしい笑みを浮かべながらリヨーダ先輩とキムラ先輩がわたしに
恥ずかしいことを言わせようと促します。

「え…あの、フリーマンコ…です」

「そうそう、そういう素直なのマジ大事! つづーわけでセイナちゃんのフリーマ
ンコいだときます!」

そう言つてリヨーダ先輩がのしかかってきます。

「え…ああ、ひやあああんん!!」

ズブズブと入ってくるリョータ先輩の筋肉質なおちんちん。このサークルの中で一番筋肉質なリョータ先輩に押し倒されちゃつたらわたしに抵抗できるはずがありません。

「うひよ、さすがに愛撫しまくつただけあるな。もう完全にトロトロだわ」「あんっひやああ、い、言わないでえ…んふうう」

「いや、だつて本当のことだし。セイナちゃんのオマンコも嬉しそうにオレのチンポに吸い付いてきてるし」

笑いながらリョータ先輩がいいます。ほんの一瞬で部屋中が喘ぎ声で充満して、みんな先輩方に犯されて気持ちよさそうに声を上げているのです。

「ほらほら、リョータのチンポどーよ」

そう言いながらキムラ先輩が唇を重ねてきます。先輩の舌が絡みついて、ズンズン突き上げるリョータ先輩のおちんちんがまるでわたしを壊そうとしているみたいですね。

「んちゅつはあんつふああ、乱暴でえ激しくてええ…んふうしゅごいですう

う

キムラ先輩の唇が離れると促されるがままにわたしは恥ずかしい言葉を口にします。

「はあん…しょこ」しょこおおおおりヨータ先輩のおちんちんついてるううう
「オレともキスしよーぜ。フリーマンコのセイナちゃん」

そう言つて唇を突き出す。リヨータ先輩、そのお口にわたしは自ら唇を重ね、媚びるよに舌を絡めてしまいました。

「はああん…ああちゅつ…ちゅふつ…んふうう。キス好きい…んんはあ…」

リヨータ先輩のたくましい胸板におっぱいをこすりつけて腰を振つて気持ちいい場所にリヨータ先輩のおちんちんが当たるようにながらキスを続けます。わたくしよりもかなり大きくて背の高いリヨータ先輩の首に腕を回して繋かりながら手伸びしてキスをしているとどんどんふわふわした気持ちになつていつてしまします。

「んん…ちゅふ…ちゅる…んふうう…ちゅふつ」

ついばむようにリヨータ先輩の口にキスの雨を振らせながら快感に身を委ねていると、キムラ先輩が肩をたたいてきます。

「オレのにもキスしてよ。おら、リョータもつと倒せ」

キムラ先輩の唇にわたしの口を寄せようとするとそうじやないと顔を下に誘導させられます。

「ちげーよ、口同士のキスはさつきしてやつたつしよ。今度はチンコにキスしきつてーの」

「ひやあああんん、そ、そんなんああ…」

わたしがキムラ先輩の下半身に顔を寄せやすいようにリョータ先輩がわたしを押し倒します。その動作に、いまままであたつていなかつた深い場所にリョータ先輩のオチンチンがあたつて更にわたしは気持ちよくなつてしまします。そしてそのまま、突き出されたキムラ先輩の男性器、それもさつきわたしの中に入つていて洗われてすらいいドロドロのものにキスをしてしまいます。

「おお、セイナマジ優しいわ。チンコにキスとかオレならぜつてーしねーけど、してくれるセイナ、神じやね?」

わたしの唇が赤黒いいびつな形をした先輩男性器に触れてしまます。男の人の匂いが濃厚なほどに漂うその部分が唇にそのふわふわした肉の感触が伝わりま

す。そしてキスを下唇が離れるか離れないかの段階でそういうってキムラ先輩がわたしの頭をわしやわしやなでながらそう言います。なんだかひどいことを言われている気もしますが、褒められているので気持ちがいいです。やっぱりイケメンの先輩に褒めもらえると女子として嬉しくなってしますから。

「おお、チンポにキスした瞬間セイナちゃんキュつてしまつたす！」

「おいおい、マジかよ。どんだけビッチに出来てるんだ、セイナは。おらおら、チンポだぞー！」

そういうってキムラ先輩が腰を振つてたくましい男の人の部分をわたしの唇に押し付けてきます。嫌ですが、リヨータ先輩にのしかかられて、組み伏せられるわたしに抵抗することはできません。

「ひやあああん…あんつ…はああん…やめ、やめてください…んんはああ」

口で言つても一人とも止める気配はありません。ふにふにとした肉の感触が唇に押し当てられ、それどころか中に入つてこようとします。

「あつ、キム先輩！またキュッとしたつす。やべえつす。もつとやつてくださいよ」

「しゃーないな。セイナ、ほら、嫌かも知んないけど、うちの女子部員はみんなフエラもできつからな。ほら、口を開けろ、リョータも、もつと気持ちよくしてやれよ」

「うつす」

その掛け声とともにリョータ先輩の腰使いのリズムが早くて浅い部分をまるでゴリゴリ削るような感じになります。

「ひやあああん…ほんつあああん…んんんふうう…」

そして快感のよがり声にわたしが口を開けた瞬間一気にキムラ先輩のおちんちんが口の中に入ってきます。なんとも言えない味、なのにエツチな男の匂いが鼻いっぱいにひろがって、キムラ先輩の陰毛が鼻をくすぐります。

「ほら、歯を立てるなよ。口をすぼめる。そそういい感じだ。やつぱセイナはいい子だわ」

そう言いながらヘコヘコと腰をふるキムラ先輩。そしてズンズン突き上げてくれるリョータ先輩。なんだか、動けない状態でエッチのための人形みたいに扱われてゐるに、今まででひよつとしたら一番気持ちよくなつてゐるかも知れません。

「ああ、いい。セイナの舌が感じるたびに絡みついてくる」

「こつちもやばいっす。セイナちゃんのマンコがちゅうちゅう吸い付いてくるみたいで、マジばねえっす」

口さえ塞がれて声も出ないのに、息をすればするほどキムラ先輩の匂いが私の中に入つてきて、どんどん男の人に気持ちよくされてしまひます。

「んんんふつ…ふんんつんんつーーー！」

「おお、セイナがイキたがつてゐみたいだぜ！」

「ああ、オレもやばいっす」

「つてかお前らわかつてると思うけど、今日は中出し~~だ~~だから。この人数で出

しまくつたらどいつもこいつもザーメン臭い臭マンになつちまうからな」

なんだか朦朧とした意識の中でそんな言葉が聞こえますが、意味はもうわかりません。ただ感じるのは突き上げられるリョータ先輩の肉棒のズンズンつと

いう深い快感 口のなかで暴れるキムラ先輩のモノ。はんつあああ、いい、いい、しゅごしゅぎるうううううつと口が空いていたら叫んでいそうなほど全身が快感そのものになつて痙攣してしまいます。

「うおつやべええセイナちゃんすげえイつてるつす！まるで俺のチンポ搾つてるみたいにキててやばすぎるつす、ああ、オレもやばい、これはやばいっす！」
その言葉とともにあんなにグイグイわたしの体を押してきていたリヨータ先輩のものが一気に抜かれて、ひくひく震えながら痙攣するわたしの敏感な場所がボツカリと空き、すーすー空気が入ってきて物足りなくなつてしまします。

直後わたしの鼻先に押し付けられるリヨータ先輩のトロトロのおちんちん。絶頂の余韻で未だにビクビクして体が動かせないわたしのほつぺたに向かつてそれが押し付けられます。

「つてか、キム先輩。なんすかそれ、フエラつてか単に口に突っ込んでるだけじやいっすか」

「まーな。むしろチンポでセイナの歯を裏側からコスつて汚れたチンポで逆歯磨きつてわけだ。チンカスマンカスをセイナの白い歯できれいにこすつてな。まー

セイナのマンコがあくまでチンポ丸出しつてのも寒いだろ、だから風邪引かない
ようにセイナの口の中で温めてたつづ一わけよ。つてか、こうするじやん、内側
からセイナのほつべをチンポでつくじやん

「うわっなんっすか、セイナちゃんのほつべがキム先輩のチンポの形に突き出て
ぶっさ、あつやばい出るう！」

直後。バタバタと私のほつべたに熱いものが飛び散ります、

「ブサ顔でいくとかリヨータ実は『専じやね?』

「先輩勘弁してくださいっすよ」

「そんじやつオレは空いたセイナのマンコに温めたチンポ突っ込むわ。セイナな
んかやばいぐらいイツつて動けないっぽいから顔で遊ぶんなら今だぞ」
二人の会話が聞こえますがふわふわしてあんまり実感がありません。そしてす
ぐに、わたしの恥ずかしい場所にキムラ先輩のよくわたしのことをわかってるオ
チンチンが入ってきました♡。ああ、おつつきい♡

九月・キムラ先輩のコミュニケーション

テニサーの夏合宿が終わってそろそろ1月が経ちます。あの4泊5日の後、女子は全員先輩のお家にそれでお持ち帰りされて、結局1週間ほど毎日のようにエッチしてしまいました。それ以来、エッチのハードルが下がってしまったのは確かです。それに、わたし自身が今まで知らなかつた気持ちのいいことを知つてしまつたというのもあります。

9月になつても大学はまだ夏休みです。あれ以来ゲーム研究会には顔を出せていません。FGIAの夏のイベントがあつたりしたんですが、テニサーの方で忙しくてあまり、と言つても人よりはやつてる方だと思いますけど、できていませんし。

今日はキムラ先輩に渋谷に呼び出されました。わたしとお買い物に行きたいつてお誘いがあつたんです。これつて、ひょつとして…デ、デートつてことなんでしょうか?確かにキムラ先輩とはたくさんエッチしてますけど、こんなふうに一人つきりでどこかに言おうなんて言わされたのは初めてです。

「ひやんっ！」

突然誰かにお尻を掴まれて声が出てしまいます。

「セイナ、待つた？」

耳元でいまセクハラしたことなんてなかつたみたいに囁かれます。待ち合わせの時間は15分も過ぎていて、それを聞かれるのもちよつと反応に困ります。

「キムラ先輩、あの、遅刻ですよ…」

「他の女子が離してくれなくつてさー。セイナを特別扱いするなつつーんだわ」

そんなふうに言われてしまつと何も言えません。そんなサークルで一番人気の先輩を独占しちゃうんだと思うと、ちょっとくらい遅刻しても仕方ないんじやないかと思いますし。

「ほら、いくぞ！」

そう言つてむにむにとわたしのおとなしめのロングスカートの上からお尻を押します。わたしのお尻をわたしよりたくさん触つてるキムラ先輩の手には遠慮がありません。

「クレカ作つてきたよな？」

「はい…」

「おけおけー、今どきクレカも持つてない大学生とかダサすぎるもんな。じゃーショッピングに行こーぜ、セイナの新しいクレカもあるしな♪」

そういうついでいつもの自分勝手な感じでわたしのほっぺたにチュッとキスをします。なんだか普段より人に見られている気がします。やっぱりキムラ先輩がかっこいいから目立っちゃうんでしょうか?

そのままキムラ先輩にエッチないだずらをされつつ、今までわたし入ったことのないお店を周ります。はじめは値段が高いけど思つたより普通のお店で安心したのですが、どのお店に入つてもキムラ先輩の『これイイじやん』という服はエッチなものばかりで反応に困ります。

そして夕方になる頃にはすっかりわたしは変わつてしまつていました。美容院で髪を染めてキムラ先輩の選んだ明るい茶色にしてもらつて、上は白いシャツのみで、エッチな黒いブラが透けて見えちゃつてますし（いいじやん、今どきブラぐらい見せてもふつーだし）、今まで履いたことがないような超ローライズなデニム生地の黒ミニスカート（こんぐらいセクシーな方が男ウケはぜつてーいい

（せ）で、とても「ごてごて」したベルト（かつけーじやん。いいアクセントだと思つぜ）です。そして歩き慣れないヒールの高いブーツはとても不安定でグラグラするたびにキムラ先輩がお尻を支えてくれます。ペディキュアもマニキュアもキムラ先輩のおすすめのお店で初めてしてもらいました。なんだかユウコ先輩みたいな都会の女子っぽくてドキドキします。わたしがわたしじやなくなつちゃつたみたいに、そんな気持ちです。

「セイナ、その紙袋邪魔じやん。ただでさえ歩きにくそうだし」

「そう声をかけられてわたしははつと我に返ります。

「でもこの中には…着てきた服が…」

「わーつてるつて。だから捨てちまえつて。ほら、そこにちょうどゴミ箱あるじやん。セイナに似合わないダサい服なんかあそこにぶちこんじまえつて」

「わたしの腰に当てられた先輩の手に力が入ります。

「…うん。そ、そうですよね。こんなダサいですもんね…」

そしてわたしは結構気に入っていた服を渋谷のゴミ箱に捨ててしまつたのです。キムラ先輩に抱かれながら。

そしてそんなことなかつたみたいに、なんだかんだ楽しくて、頭の片隅でクレジットカードの支払のこととかは気になるもののやつぱりわたしはキムラ先輩が好きなんだなと思います。きっとキムラ先輩もわざわざわたしと一日過ごしてくれるくらいなんだから…。

そのままおしゃれなバルでディナーをとつて、キムラ先輩のお部屋に流れで行くことになります。

キムラ先輩のお部屋は新宿のデザイナーズタワーマンション。始めてきたときはそれどころじやなくて気づかなかつたのですが、夜景が見えてすごくきれいです。

「セイナ」

そうキムラ先輩が私の名前を呼びます。もうそれだけでキムラ先輩が何を期待しているのかわたしはわかつてしまします。それくらいすっかり先輩のことをわたしは知つてしまつていたのです。

先輩の首に手を回して背伸びして唇を重ねます。

「ちゅつ…ちゅふ…んちゅふ…ぶちゅちゅちゅ」

そしてわたしの方から舌を先輩の中に差し入れて先輩が興奮するやり方でキスをします。先輩の手がわたしのスカートの中に入ってきて、さつき買ったばかりのとつてもエッチな黒い下着の上からわたしの敏感な場所をなぞります。

「ちゅふ…んふう…ちゅるるるつちゅつちゅば…んんふう」

「んはあ…セイナ、すっかりベロチューも上達したな。ほら、キスだけでこんなになつてるぜ」

押し付けられる先輩のオチンチンはスカート越しでさえも硬く滾つていてことがわかるほどに大きくなっています。そしてそれをスカート越しに感じてドキドキして思わず自分の恥ずかしい場所を無意識にこすりつけてしまいます。

「ほら、まずは口でやつてくれつか?・セイナ、まだあんま得意じやないつしょ。特訓だな」

そう言つてキムラ先輩がわたしをベッドの上に押し倒します。わたしの処女が散らされた先輩のベッド、あのときはわたしは酔つていて抵抗できませんでした。今は大の字になつたキムラ先輩のもつこりとした下半身を自分から優しくマニキュアで塗られた指でなぞつて、カチヤカチヤとベルトを外します。ズボンの

チャックをおろすと、見慣れた先輩の黒いボクサー・パンツごしにツンと先輩の匂いがします。それまずパンツの上から舌でレロレロと唾液がしみるよう舐めてあげます。センパイのボクサー・パンツを舐めながら男の人の匂いに腰が揺れてしまうのがわかります。

「すっかりオレの好みを覚えちまつたな。初めてここにきたときはセイナ暴れて嫌だつてたよな。いまじやすっかりオレのチンポをペロペロできるいい女つてわけだ」

もつこりと膨らんだ先輩の下着の向こうから私のことを見下ろしているキムラ先輩と視線が会います。先輩の手が伸びてきて私の頭をなでます。満足してくれてるみたいでうれしくて胸がキュンとします。キムラ先輩のパンツに指をかけると布地越しでさえも熱いと感じた男らしい勃起ペニスが堂々とでてきます。

「セイナはどーよーこーしてヴァージンロストしたベッドの上でセイナの初めてマンコの相手のチンポしやぶつて

「え、あの、わたしも、その…なんていつたらいいか…」

「ハハハ、腰ふるのはうまくなってもその喋り方はかわんねーな。陰キヤ丸出し
じゃん」

キムラ先輩がわたしの鼻をおしつこ臭が少し残るおちんちんの先っぽでグイグ
イ押しながらそう言います。

「まーそーゆーのもちよろそーだつたから楽しかつたけど オレラもそんな陰キ
ヤなセイナにそろそろ飽きてきたんだわ」

いきなりのセリフに困ります。キムラ先輩に飽きられたくない、せつかく仲良
くなつたのに…大学生っぽくBBQもしたし夏合宿もしたしデートもしたし、今ど
きな感じの女子になれて、うまく行けばキムラ先輩とお付き合いできるかもつと
思つてたのに。つい癖で伏し目にならうとした私の顔を鼻にあてがわれたキムラ
先輩のオチンチンが押し上げます。

「そう、そーゆーところだつて。オレラがうんざりしてるの。そんなキャラがパ
ーティーにいたら盛り下がるじゃん、つづーわけでオレがこれからセイナのコミ
ュ力改善陽キャデビューを手伝つちやうぜ!」

一瞬何を言われたかわかりませんでした。でもすぐにもつともつとわたしがみんなと仲良くなれることで、飽きられたりしなくてすむのだとわかつて嬉しくて、涙がぽろりとこぼれます。ずっとコミュ障でどもりグセのわたしが変われるかもしないんです。

「ほらほら、でもさもちろんただつづー訳にはいかないワケ。オレが今後セイナのコミュ力インストラクターになるつづー訳だけど、せっかくボランティアしてやるんだからさ、今後はセイナにオレのチンポの面倒見てほしーんだわ。まつ今までときほど変わらねーか。やりたくなったときは呼び出すからさ、すぐに来てほしーわけ。そんぐらいいいだろ? セイナがコミュ障克服できるつづーならこんぐらいい安いじyan。

あとさ、セイナは今後オレの言うことは全部聞けよ。セイナのコミュ力インストラクターとしてセイナの生活を根本から陽キヤパリ。ビに変えてかなきやいけねーだろ?

つーわけで、以上2点がおつけーならオレのチンポにキスしてよ」

そんな勝手なことをキムラ先輩が言つておちんちんをグリグリと押し付けてきます。わたしはもちろん何をされるか怖いですけど、でもキムラ先輩に見捨てられて一生喪女で終えるのはもつと嫌です。恐る恐るわたしの顔に押し付けられている血管の浮き出た硬い肉棒にキスします。

カシャつと音がして目を上げるとキムラ先輩がスマホを持っていました。

「だめだめ、表情硬すぎる。ほら笑顔で、陽キヤはカメラが向けられたらサイコーのスマイルマックスでピースするもんだぜ。ほらもう一回、スマイルスマイル」

勃起した先輩のおちんちんを顔に押しつけられながらそんなことを言われます。でもいま何でも言つたばかりなのに拒否することもできず、わたしはがんばって笑顔を作つて先輩のカメラに向かつて上目遣いでピースします。

「そうそう、オレのチンポに頬ずりしながら笑顔でピース決めるのかマジ楽しそーじゃん。じゃーこれからすることを説明してよ。つつてもまだコミュ障のセイナジや無理だから、オレが教えてやるとおりに楽しそーにいつてよ」

そう言つてキムラ先輩が恥ずかしい言葉をささやきます。

「え、でも…」

「いえよ、ユウコだつたら自分で考えてこんぐらい言えるぜ。恥ずかしがつてたら一生陰キヤコミュ障ブスのまんまだぜ」

キムラ先輩がおちんちんで軽くわたしのことをはたきます。先走りのエツチな汁が肌について先輩がわたしに期待することがわかります。

「えつと、あの、これからキムラ先輩の鬼硬デカ・チンポを…セイナのお口でちゅぱちゅぱ…おしゃぶりして、デカチンポとのコミュニケーションを教えてもらいまー！…す」

「ほら、笑顔」

「えつ、えへへ」

「よし、じやあしやぶつていいぞ。適当にしゃぶつてる間、オレがコミュニケーションのコツつてやつを教えてやるわ」

キムラ先輩の許可が出てやつとわたしの日の前でお預けにされていた熱いものにご奉仕できます。すっかり慣れてしまつたわたしの口いっぱいにひろがるすつ

かり馴染んでしまった先輩の男の臭い。汗と先走りの混じった味は舌を刺激します。

「まづな、コミュニケーションつーのは相手が望むことをしてやるとこから始めるわけよ。ほら、今だつてセイナはオレのしてほしいことをしてるわけじやん、これも立派なコミュ力つーわけよ。オレも初めてセイナを見たときからわかつてたね、こいつ地味なコミュ障ブスのくせに大学デビューしてイケメンの彼氏が欲しいとか考へてるなつて」

「んぐ…んぎゅじゅふふふ…んんはあ…じゅる、じゅるるるる…ちゅぱちゅぱ」

先輩が上機嫌でコミュニケーションについて語っているのを聞きながら教えられた通りの舌使いでしやぶります。陰茎の裏筋を舌でなぞりながら茎の部分を甘噛して、ふにふにと陰嚢をマッサージします。

「つづーわけで、あのときレイプしてやつたつてわけよ。わかるか？相手目線で何をして何を言えばいいか考へるつてのがコミュ力上げるコツなわけよ。

じゃ、問題だ、相手目線つつーことを考えてここで初めてのファックをキメたことに一言コメントくれや。あ、笑顔忘れるなよ」

あんまりにもあからさまな命令です。でも、わたしが拒否できるはずもないですし、がんばってキムラ先輩に認められるようなコミュ力がほしいです。

「えっと、あの…あのときはキムラ先輩にレイプしていただいて…う、うれしかったです」

「まあ、50点つてどこかな。そんな重い言い方じや萎えるぜ。ほら、こう言えよ」

そんな…あんまりにも恥ずかしくて女の子が言っちゃ駄目なことを「言うように囁かれてしまいます。でも、きっとこれもわたしがコミュ障を克服してみんなに馴染めるようにキムラ先輩がせつからく教えてくださつてることなのかも…と思うともうわたしは拒否もできません。そしておそるおそる恥ずかしくて下品な言葉を私は口にしてしまったのです。

「あの、…あの時はセイナの、しょ…処女マンパンチ。チツチってみんなに破つてもうえたのにーお礼の一つも言えない…」、コミュ障ブスでえ、…」、ごめんなさい！セイナほんとはちょー、う、嬉しかったの、えへへ」

「そうだ、チンコ見てみる。さつきより勃起しててるだろ。言葉だけでこんなになつたつつーわけよ！」

その言葉とともに突き出されたキムラ先輩のオチンチンはたしかにさつきよりも興奮しているみたいにプルプル震えています。

「おつけー、おつけー。まだちよつとどもつてたけど、まー合格かな。じやあ、次の相手目線の練習してみよーぜ。ほら、セイナが初めて俺らとファックしたベッドの上で今度はセイナが自分からオレのチンコお前のマンコで咥えてくれよ」

「え…」

思わず思考停止してしまいます。

「ほらほら、今までずっとセイナエッチの時はオレラにされるがままだつたじやん。それってすつげー自分勝手のコミュ障ブスじやん。できるオンナつてーのは

もつと積極的にさ、オレラのことを思いやつてくれるわけよ。つつーわけで、今日くらいセイナが上になつて腰振つてくれよ。腰あるのだつて疲れるじやん」たしかにそうなのかもしません。エッチのときつて毎回先輩が上になつてわたしは受け身で先輩の気持ちなんか考えてなかつたと気が付かされます。それなのに先輩とお付き合いできると思つてたなんてわたしつて本当にコミュ障バスです。

わたしは先輩の体の上を這つよう登つていつて、恥ずかしい部分を男の人の硬く勃起した肉棒にあてがいます。

「おつけーおつけ、そこですとつーふーさつきのもそうだけどセイナはさ、喋り方からもつと変えてく必要あると思うんだよね、オレは。つてか、セイナの喋り方とか重くて付き合いづらいまんまコミュ障じやん。そんなオンナと付き合いたいって思うか?」

そう言つてキムラ先輩がわたしの目を下から覗き込みます。軽蔑したような威力したような先輩の表情はやつぱりわたしがコミュ障だからでしょか。わたしはもちろん先輩が期待することを汲み取つて首を横に振ります。

「んじやあ、ここつてなんていう?」

そういうつて先輩が腰を少し動かして熱い肉棒でわたしの恥ずかしい部分を突つきます。

「え、つと・・ヴァギナつですか?」

「だめだめ、イケてる連中はチンポとマンコつて言うつていい加減氣つけよ。しかも嬉しそうに言うのがコツだからな。じやあ、もう一回、これなうんだ?」

そういうつてグリグリとキムラ先輩の男の部分が押し付けられます。ああ、こんな恥ずかしすぎる。でも、頑張らなきや。そうわたしは覚悟をきめて笑顔を作ります。本当は恥ずかしくてそれどころじゃないのに…。

「はあ〜ん!キムラ先輩のオ・チ・ン・ボ!」

「お、いい笑顔じやん!大正解、じやあどうしてほしい?」

「え〜っとお、オ・マ・ン・コしてほしいでーす」

なんだかわたしの口から出てきた言葉とは思えませんでした。でも、もう数ヶ月テニサーの皆さんと遊んでいるので知らず知らず何を言えればいいかわかつてゐのかもしれません。

「おつけー、じやあ、セイナ右手でマンコ開いて左手でチンポ支えて一気にいつ
ちゃえー。セイナの初めてレイプしたオレのチンポを今度はセイナが逆レイプす
るんだ」

はじめての行為にドキドキしながら言われたようにします。先端が指で割り開
かれたわたしのおマンコにあたつて熱を感じます。
「そーそ、さつき言つたことを忘れんなよ。チンポの立場になつてどうしたら氣
持ちいいか考えながらどんどんいれてつてよ!」

「んん…キムラ先輩のおチンポ…はあ…熱いです」

おチンポの立場を意識すると必然的にわたしのオマンコを意識してしまってので
普通以上に敏感になつてしまつてなかなか受け入れられません。こんなのダメな
のに…。

「んん、セイナの中…、どうですか?お、おチンポ…ふふはあ…気持ちいいです
か?」

ドキドキしながらそう聞きます。なんだか頭の中がおチンポのことでいっぱい
になつたような気がして赤面しながら、ゆっくりとおチンポを加えこんでいきま

す。おチンポが震えるたびに、気持ちいいのかなうそれとも良くないのかなって考えて動きます。

「いい感じだぜ、でももつと一気に入れてくれてもいいかも」「ああああんん、こ、こうですか」

敏感なのにむりやり腰を下ろして、恥ずかしい声が漏れ出でてしまいます。

「おけおけー、そのまま腰振つてみてよ。あ、せつかくセイナが恥ずかしい言葉覚えてくれたし、ご褒美やるわ。こつからセイナがチンポとかマンコとか言うたびにオレもセイナのこと気持ちよくしてやるわ」

わたしの中でピク。ピク震えるゆっくりおチンポの反応を見ながら恐る恐る腰を振つてみます。

「え、あのキムラ先輩のお、おチンポ、ひやああん、奥まで来てますう」
おチンポと言つた瞬間キムラ先輩が下から激しく突き上げてきて、一気にわたしは快感に飲み込まれてしまいます。

「オレラちゃんとセイナのこと考えてたからセイナの気持ち良い場所全部わかるんだわ」

そう言いながらぐりぐりと奥をえぐられると、たつたそれだけで気持ちいい感じが一瞬で変わつて、声が出てしまします。

「はあ・あんつオマンコお…いいののお！ひやああんんオマンコおおお、キムラしえんぱいのおおおチンポ…いいいののお」

「ほら、どんなチンポだ言つてみろよ！」

わたししが恥ずかしい言葉を言えば言うほど、下から突き上げられてしまつて、気持ちよくなつてしまします。でもおチンポのこと考えてあげて、先輩を気持ちよくしないと。そう思つて快感にがくがく震える腰をゆつくりと振ります。

「おつつきくてええ、硬くてええ、はあんつ・熱いおチンポおお、ひやつはあああんん！」

「そうそう、そのまま腰を丸くグラインドさせてよ」

「こ、こうですかああ…あああんん、おチンポ…んはあん…の当たる場所変わつたああ！」

先輩に言われるがままに、先輩のお家のベッドの上で腰を振つてしまます。

「そうそう、じゃあラストスパート行くぜ」

「はいはい、がんばってええ、腰ふっちゃいますうう！」

一生懸命わたしのオマンコに神経を集中させておチンポのことを思いやりながら腰を振ります。あ、今おチンポ震えた♡ここがいいのかな、子宮口でぐりぐりつて擦り上げたら気持ちよさそう。まるでわたしの頭の中がおチンポとオマンコでいっぱいになつたように感じながら一生懸命腰を振ります。わたしのオマンコ越しにキムラセンパイのおチンポの形を感じます。裏筋をぞりぞりつてわたしの敏感な部分で締めてみます。あはつ♡ここがいいんだ。

「あんんんつ、はああ、キムラセンパイのおおチンポおお、わたしの赤ちゃんの入り口にいい…ちゅううつてキスしちゃつてますうう！あああんつ！イイつ！そこ、そこイイのおんつあはあんつ♡はあんいんんつはああああ！」

キムラセンパイのおチンポがわたしの中にずんづんつて力強く突き上げてきて、わたしも一生懸命オマンコで気持ちよくなつて貰おうと思つてがんばります。でも、気持ちよすぎておチンポのことしか考えられなくて、もうぜんぜん細かいことまで気が回りません。こんなことならもっとお口でキムラセンパイのお

チンポおしゃぶりしてどこがきもちいいのか、どんななかたちなのかちゃんと覚えておけばもつともつとキムラセンパイに気持ちよくなつてもらえたのに。「おら、そろそろオレもイきたいからさ、セイナももつとガンガン腰振つてくれよ！」

「つはああんつ、ハイいいーがんばりますっんーがんばつてえええええ、腰をおお！振っちゃいますううううう」

結局もう訳が分かんなくなりながら無我夢中で腰を振ります。センパイのどんどん腰を振つてきて、もうまるでわたしの体がセンパイのぶつといおチンポで全身貫かれて頭の中までおチンポ一色にされちゃつた気がします。

「はああんつ！やばいいい、おチンポ♥イイイいい！ひやんつはああんつおチ
ンポつおチンポつおチンポ！デカチンポおおおおお！おつ、オマンコおお気持ち
よすぎてぶつ壊れそうなののおおお！」

「おお、セイナ、ぶつ壊れちまえ！ぶつ壊れたらオレが作り直してやつから。
ヘンタイオマンコ大好き♪セイナにな」

「しょ、しょんなあああああああ！だめっだめっ、壊れたくないのにいいオマンコよ
しゅぎるううううう！」

「ちげーよ、そこは壊してくださいだろーが。これだからコミュ障ブスは！」

「ひやあああんつ、イツちやうイツちやうイチやつてるうううう！わたしのオマ
ンコ壊されちゃつてりゅうううううう！」

絶頂に全身を痙攣させながら快感に意識が真っ白になつてセンパイのたくまし
い胸板に倒れ込んでしまいます。ああ、キムラセンパイの臭いに包まれながら幸
せがわたしの下半身にあふれてじんじんするまどろみに身を委ねてしまいます。
「セイナ、オレらハロウインにコスプレ乱交パーティーするんだわ。とーぜん、セ
イナも参加するべ。そんときはメイド服でヨロシク、セイナだつてオタクだしそ
ういうの得意じやん」

そう耳元で囁かれちゃうともう抵抗も何もありません。ただただ、キムラ先輩
のお願いを聞いてあげたくて仕方なくなつちやいます。

十一月・セイナのスペシャルベースデーパーティ

今日はわたしの誕生日です。そしてキムくんと一緒に準備したテニサーのセンパイみんなへのわたしの感謝パーティーです。

わたしは自分の下宿のドアの前でキムくんがサークルのみんなに今日の説明をしてくれてるのを聞いてドキドキしながら入るタイミングをはかります。余興のために今日はわざわざ高校の時の制服を来て います。でもキムくんとエッチしうぎて体型が変わっちゃったのかちょっときついかも。

「お前ら、今日はセイナの誕生日。パーティーに来てくれてありがとう。ってか、オレが言うのもおかしいか。まつ、今日はただの誕生日。パーティーってだけじゃなくてさ、オレがセイナをちゃんとオレラにふさわしいギャルビッチ部員に調教したつてプレゼントパーティーなんだわ。つづーわけでみんな気にしないで楽しんでくれよ！セイナ、マジやべーから」

そこでキムくんが扉を開けます。

「センパーイ、セイナのお誕生日会に来てくれてありがとうね☆

今日はあ、セイナの誕生日だけどお、コミュ障ブスだったクズオタク女子のセイナをお、レイプしてイケイケ陽キャビッチになれるよーにしてくれたセンパイたちに感謝する日したいんだー、イエイ！

「見てみろよ、セイナ。もう完全にイケイケじやん。サイコーにいい感じだぜ！」

「そう言つてセンパイがわたしのスカートをめぐりあげます。

「ありがとー、チュ」

スカートを捲つて『レイプしてくれてありがとー』と手書きで書かれた無地のパンツをみんなの前に公開しちゃつてるキムくんのほつぺたに軽くキスします。

「今日はあ、セイナがロストトヴァージンした日にいたセンパイみんなに集まつてもらいましたあ。みんな、セイナのはじめての大事な人達だから、感謝の気持ちでみんなにはこれからずっとフリー・エッチ宣言しちゃいます！イエイ！」わたしが笑顔で。ピースサインを振りまくと、みんなびっくりしたみたいで『マジかよ！』とか言つちゃつて期待通りの可愛いリアクションです。

「つでえ、みんなの手元にはプレゼントが2つあるよね？小さい方を開けてみて、セイナの部屋の合鍵はいってるかな？セイナのことを変えてくれたセンパイたちにセイナからの誕生日プレゼントでーす♡セイナがラブなのはあきみくんだけど、みんなだつたらエッチもぜんぜんオッケー☆ウエルカムだよー」

キムくんがスカートをわたしに持たせて、今度はお尻をもみ始めます。すっかり馴染んだキムくんの手がむにむにわたしのお尻を揉みしだいて。パンツの上からいたずらしてきます。セクハラスキンシップマジ大事なので、喋りながらお尻をふりふりして楽しんことを伝えます！

「つてか、今日はセイナの誕生日だからみんなプレゼントとか考えたと思うんだけどお、そういう面倒くさいの大丈夫だよ！みんなが気を使わなくていいよ！」セイナ自分用の誕生日。プレゼント自分で用意しちゃいました☆相手目線チヨー大事！気も使わなくてもいいし、お財布にも優しいセイナちょーいいオンナじやん。つてーわけでえ、リヨーくん、プレゼントくださいよお」

わたしが自分で準備して買っておいたプレゼントをリヨータセンパイにねだります。まー、中身よりも男のセンパイにプレゼントしてもらうつてのが女子的にはステータスで重要なんです。

「え、オレ?うつす、じやあ中に何入ってるか知らないっすけど、セイナちゃん誕生日オメつす。今度大学で抜いてもらつてもいいっすか?」

そう言いながら、リヨータセンパイが包みをわたしてくれる。以前は筋肉ムキムキでちょっと怖いと思ってたけど、見方を変えればちょ一勢いのある逞しいエツチができる頼れるスポーツマンのセンパイってことだし、サイコーっしょ。

「えつ、口でそれともセイナのマン穴?どっちでもいいで~す! プレゼントは何かなあ? ああ、『シャツじやん。ちょーかわいい!』じゃー、着替えるねー!」

それはわたしがユウコセンパイとプレゼントを買いに行つて選んでもらつたセクシーキュート系の『シャツで、なんと下乳が見えちゃう系の激ヤバセクシースタイルです。しかも上乳の部分にピンクで可愛く『Easy Hole♡』とか書かれてて、こんなの来てたらすぐにレイプされちゃうよ~うなヤバ楽しいシャツです。

「じゃあ、高校の時の地味なセーラー服はセイナにはにあわないから。ボイつっちゃいますね。でもでも、コスプレエッチがしたかつたら言つてくださいね。セイナ頑張つちゃいますから」

つていうか実際キムくんとはもう何度もセーラー服でコスプレエッチしまくつちやつてるし。こーゆーエッチできるのつて十代の特権じゃん。

そしてセーラー服を脱いで、その下のお母さんが買つてきた地味なブラをゴミ箱に放り込んで、もつたばかりの新品のビッチ「シャツを着ちやいます。つてか布地の上からでも乳首透けちやつててマジウケる。

そしてそのままプレゼントの開封が進んで、どんどんビッチになつちやいます。しかもプレゼントしてくれるセンパイがわたしに着せたいと言つてくださいつたので、余計にエッチな感じです。膝丈のプリーツスカートを男のセンパイたちがわたしに着せてくれます。なんだか王子様に囲まれるお姫様気分で嬉しくてお尻をふりふりすると、みんな容赦なくセイナのお尻をさわさわしてきます。なんと言つてもこのスカート、お尻の部分がハート型に大きくなり抜かれていて、わ

たしのお尻が丸見えなのです。しかもスカート自体も薄い生地なので、生地越しにくりくりオマンコをいじられるとシミが付いちゃいます。

もちろん、みんなへのメッセージカード代わりの白パンツもメッセージカード代わりにする以外使いみちがないのでゴミ箱行きで、代わりに黒いフリフリがついたショーツが男のセンパイたちの手で着せられちゃいます。つてか、みんな着せながらわたしにクンニしてくるのすつごいうれしい。センパイたちなりにわたしの気遣いにお礼してくれてるんだって感じられます。

ニーソックスだけが高校時代のままで、正面からは白い清楚なブリーツスカートスカート、後ろからはスカートからくり抜かれたお尻が黒いオープンショーツで飾られてるのが丸出しのケツだしひッチで下乳丸見え乳首スケスケのEasy HoleなイケイケJDに生まれ変わっちゃいました♡センパイたちのおチンポもズボンの上から丸わりなくらいガチガチに勃起してます。

「みんなー、プレゼントありがとー。みんなと仲良くなれてえ、セイナーチョー ハッピーだよ！

セイナはじめはあ、びっくりして泣いちゃったけどー、今はテニサーのみんなにカビの生えた処女マン開けてもらつて、オマンコ大好きな大人のギャルに変えてもらつたこと、ちょー感謝してまーす。キムくん、コミュ障ブスだつたセイナのことみつけてくれてサンキューべりーマッチ！

んちゅつぱくちゅー

そう言いながらやつぱり一番大好きなキムくんにキスをします。キムくんのタバコ臭い舌も始めは嫌だつたけど、嫌だつて思つわたしが自己中だつて教えてもらつてから大好きになつちゃつた。そして、キスをしながら、ゆつくりと手をキムくんの下半身におろしていつてたくましい体を指で感じながら、ズボンのジッパーを下ろして、いつものよく知つてるキムくんの男の部分を引き出します。ほのかに香るザーメンとおしつこの臭い、反射的に胸がキュンとトキメイちゃいます。

「んちゅ・ぢゅるるるるるる・ぢゅふふふふはあーキムくんのキスセイナだーいすき♡

今日はあせイナの19歳のたんじょーびでーす！つーわけでセイナは、10代最後の1年を。パコ。パコハメハメ、セイナを見つけてくれたテニサーのみんなとハメまくることを誓います。

「さてか、この格好少し寒いんでも、暖かくなることしたいな♡」

「そう言って、みんなの下半身に視線を送ります。

「セイナ、せつかくの誕生日なのに、ろうそく一本でいいのか？」

「そうキムくんがおチンポを突き出しながら言います。さすがキムくん、盛り上げるのうまいです。

「ダメでーす！セイナのお誕生日はあぶつといろうそくもつともつとベッドの上に立てたいでーす。リヨーくん、ベッドの上に座つてよ。ほかのみんなもセイナのベッドにいらっしゃーい。あ、このベッドも今日で最後でえ、これからはもつといろいろ遊べるキングサイズのベッド入れる予定でーす！」

「セイナマジ太っ腹じやん！」

「もー、キムくんがキヤバクラのバイト紹介してくれたからじやん」「でも、コミュ一ケーションの練習になつたつしょ？」

「まーそうですけどお。

リョーくんの体育会系おチンポズボンの上からでもバキバキだね。じゃあ、リョーくんのおチンポろうそくセイナのために立ててね」

そういうてりょーくんのズボンのチャックを下ろして硬く勃起したおチンポを優しく引き出して、待つている間に萎えないようちゅうと亀頭にキスをして舌でチロチロと尿道口を刺激してあげます。これからオマンコすることになるおチンポなのでできるだけ形を覚えて気持ちよく感じそうな場所をイメージしておきます。ちなみにいちばん大切なキムくんおチンポはもちろんずーっと握つてよしよししてあげちゃいます。

そして、六本のおチンポろうそくがわたしの部屋に林立してオスの臭いが部屋中に充满してむらむらしちゃいます。

「みんなのおチンポも一バッキバキに硬いねー。これじゃあふうつしても消えないからあ、順番にセイナのお誕生日オマンコでびゅびゅつて出させてあげちゃうねー。キムくん、どのおチンポを最初に頂いちやえぱいーと思う?」

もちろん、こういうことはキムくんに聞いておきます。だってうちのサークルで一番偉いし、わたしのことを教えてくれたステキなセンパイだから。ってかキムくんのおチンポが最初がいいよ。

「やっぱリョータじやね？ 最近別サーの女子紹介してくれたしな。それからヤマギシかな。この間サークル活動費多めに出してくれたからな」

「はーい、じやーね、リョーくん。よろしくね」

リョーくんの隣りに座つてそのわたしの親指の倍はありそうなおチンポをなでながら、背伸びして唇を重ねて、舌を差し込み、ちゅつ・チユ・ブ・ブ・チユル・チユ・ペ・んちゅ・ふ・ふつと一生懸命キスをします。その最中にわたしがおチンポを握っていた愛おしい人が言います。

「おいおい、セイナ、そろそろオレのチンポ離してくれよ。これからユウコと合コンなんだわ。付属校のJKが来るらしいから行くしかないっしょ！」

「え、キムくん…」

思わず真顔になってしまいます。

「セイナには今日さんざん学校でハメてやつたろ。ってかほら『相手目線』忘れてんぞ。リョータ困つてんだろーが。つづーか、今更嫉妬とか陰キヤつぽくね？そーいうのないのが陽キヤビツチだろ、セイナ？」

キムくんの言葉がわたしに刺さります。でも、えっと…どうすればいいんだろ…頭の中で混乱して、最後にわたしの口から出てきたのは、「あは…、そーでしたあ。セイナまだまだ練習足りないコミュ障ブスが残っちゃつてましたー。ごめんね。キムくん合コン行つてらつしやい、かわいいJKとやりまぐれるといいね」

そういうつて笑顔を作りました。

「そーそー、そーしてればセイナかわいいんだからそー もー忘れるんじやねーぞ」

そういうつてキムくんがわたしの頭をなでてくれます。先輩から認められた嬉しさでさつきの混乱した気持ちなんかどつかいっちやつて、キムくんに言われたとおりいいオンナにならなきやと心の中で決めて、笑顔で他のセンパイにいいます。

「キツチンに精のつくセイナの手料理いーっぱい用意しましたからあ、適当に食べてね。セイナはずーっとベッドの上でパコれるようにしてるからさあ♡」

「そつすよ、セイナちゃん。オレのチンポがお預けされて萎えちゃいそつす」「あ、ごつめーん。リヨーくんのおチンポ元気になつてよお♪」

「そう言いながら、わたしのベッドの上に座つた筋骨隆々のリヨーくんの股間に手を伸ばします。ズルムケのイボ付きズルむけ体育会系チンポがわたしのベッドの上でダラダラ先走りをシーツに垂らしちゃつてます。」

「リヨーくんのおチンポくん、セイナのオマンコに入りたいんだよね。どーゆー風にオマンコに入りたいの?」

「じやあバツクからでいいっすか」

「オツケー、リヨーくんの体育会系セックスチョー楽しみ。セイナのこと後ろから野獣みたいにパンパンつて気持ちよくしてほしーな」

「うつす、セイナちゃんの一番手チンポで思いつきりよがらせてやるぜ」

ビンビンに勃起したおチンポを振り立ててリョーくんが言います。ああんもう我慢できない。着替えのときからすっかり発情しちゃって、腰も浮いちやつてるのにそんな逞しいのを見せつけられちゃつたら…。

リョーくんの言われるとおりにわたしのベッドの上で四つん這いになります。このベッドの上ではまだキムくん以外とエッチしたことはなくて、キムくんはいつも騎乗位でご奉仕することが好きだから初めて犬みたいに四つん這いになります。

「つてかマジでエロい服だわ。ケツ丸出しのスカートとかビッチすぎるだろ」「えへへへ、ありがと」。みんながセイナでチンポギンギンになるよーに選んだ。もう前戯とかいいからあ、セイナの中にいリョーくんのイボ付きチンポ突っ込んで。パンパンしてほしーな

「いいぜ、一気にいくぜ」

その言葉とともにガツチリリョーくんの筋肉質な手がお尻を掴んで、一気に熱いものが発情しきつてトロトロのわたしの中に打ち込まれます。
「はあああんつ、ふ、太いのおお入つてきてる…」

「マジかよ。一気にくわえ込みやがった。夏ハメたときとはぜんぜんちがええ！」

上向きのリョーくんおチンポを膣壁でこすつて ザラザラの感覚を楽しんでもらいながらいたずらっぽく聞きます。

「前のほうがセイナマンコよかつた？」

「いや、やべえ、入れる時は一発だつたのに締め付けてきやがる。なんだろこのマンコ、くそ、やべえ名器だ！ゾリゾリ裏筋を責めてきやがる。負けてられるか」

そういうと、リョーくんが腰を振り始めます。リョーくん負けず嫌いでかわいい。

「んふうう、だつて、お、オマンコのお…はあん…使い方もお、コミュ力だつてえキムくんが言つたんだもん。い、ぱいセイナ練習したんだ。毎日大学のトイレでハメパコしてたのー！あんつ♥」

わたしのオマンコがリョーくんのデカチンポでグリグリ拡張されてる感覚がずんずんしておチンポのことしか考えられなくなっちゃいます。『つてか、JDと

かチンポのこと考える以外なにか考えること有るの?』ってキム君がなんどもエツチの最中に教えてくれたんです。

「はああん、そこ、そこがいいのぉ!筋肉デカチンポがあ、突き上げてきてるのぉ!ヤバイ、これやばいよおお!か、硬いチンポがあセイナのマンコを押し付けてるのぉお』

「まだ始まつたばつかつすよ!セイナちゃん、今晚はぶつ壊れるまで頼むつす!』

ああ、これヤバイ。デカチンポの形にわたしのマンコなつちやつてる。ゴリゴリつてえ子宮口まで圧迫されちやつてる。すごい、すごい、やばすぎるうう!

「セイナちゃんの中まじやばいっす、みんなに報告しに行こーぜ!』

そういうとりヨーくんはその筋骨隆々の腕でわたしを抱えあげると、つながつたまま持ち上げます。重力にしたがつてわたしの全身がただ一つ下半身でつながつているデカチンポにはまつてきます。ぐいぐいと子宮口を突き上げ、まるで全身を下から頭まで突き通されてるみたいになります。それにわたしのことを抱きしめるたましい腕、汗の匂いも男らしくて、初めて会つたときに怖いと感

じたのが嘘みたいです。ひょっとしたら、あのとますでにこうなるのが想像でき
たから、本能的にこのおチンポにかなわないって怖かったのかもしれません。

「あああん♡ゆつゆつくりい動いてええええ！」

リョーくんが一步歩くごとにぶつといのがゴリゴリって中にはいつてきてわた
しのオマンコを体育会系筋肉デカチンポのサイズに広げてきて、キュンキュンし
ちゃいます。あん、この体位まじやばい、リョーくんに支配されてる感半端な
い！

まるでリョーくんの体の一部になっちゃったみたいにリョーくんのおチンポの
動きを膣奥で、全身で感じちゃいます。

「うーつす、メシとつといてくださいよ」

そう言つてつながつたままリョーくんがキツチンの扉を開けます。全員の視線
がこつちに向きます。

「おお、セイナちゃんじやん。デカチンポどーよー。」

そう冷蔵庫をあさつていたセンパイの一人が聞きます。

「あああん！最高でーす！リョーくんの体育会系い、んんんふううんん、デカチ
ンボにいセイナガチラブちゅうでーす！あはああ、これまじやばいのおおおん
ん！」

「セイナちゃんのマンコまじやばいっす！キムのおもちやんなかでもトップクラ
スじやねえっすか！やべえ、チンポが幸福っす！」

「はあんん、セイナのお…んんんつマンコもお…はああん！ちょーハツピーな
お…んんふうう！リョーくんのチンポギュッギュつてえ…んはああ…気持ちよく
してあげるねえ。んはああ」

そう楽しくおしゃべりしながら下半身に力を入れてリョーくんのたくましくて
今まさにわたしのマンコを拡張しちゃってるデカ肉棒を締め付けてあげる。わた
しを抱きかかえるリョーくんの顔がとろけそうになつてちょーかわいい。
「くつそー、オレも早くはめてえーわ」「セイナちゃんどんだけキムのやつに調
教されたんだよ！」「セイナちゃん、写真取るから目線ヨロ！」

センパイたちが悔しそうに口々にそういうつて、わたしはオンナとしての優越感
が下半身からこみ上げてくるのを感じます。

そしてセンパイたちがスマホをわたしに向けて写真とかムービーを撮り始めたので、みんなが楽しくなるようにカメラ目線にピースで舌を出します。

「イエーイ！リョーくんの筋肉チンポゴチになつてまーす！はあん！セイナの誕生日マンコセンパイたちみんなでえ、たつ。ぶり味わつてね～！」

「くつそエロだわ！おい、セイナちゃん、キス！」

近くにいたセンパイが口を突き出してきて、もちろんわたしはその唇に吸い付きます。やばい、チンポをくわえこみながら別の男とベロチュートか、わたしどんだけモテてるんだろう。大学入ったときにはこんなの想像もできなかつたのに。キムくんのおかげでコミュ力上がつたからかな。マンコミニケーションマジ大事！

ちゅつぱちゅるぬちゅ・れろれろつと舌に媚びるキスをしてあげているとリョーくんがわたしに嫉妬して言います。

「やべえ、キスし始めてから綿りが更に良くなつたんだけど。何だこのエロい体は、ちくしょー負けてられるか！」

そして今まで見せつけるためにゆつくりだつた腰使いがまた体育会系らしい野獣みたいな激しい腰振りに変わります。全身がゆすられて快感でいっぱいになつてキスも続けられなくなつて嬌声だけが抑えられません。

「はああん！ああつりょーくんんん！ヤバイ、ヤバイ、チンポつつすぐすぎるうう！そこお…そこいいいのおおおーじゅんつじゅんつてええおチンポきちやつてりゅうううう！」

ああ、すごい、でかすぎてえ子宮口から△スポットまで全部パンパンチンポで圧迫されちゃつてます。

「よし、このままイクぞ！」

「はあああんん、キテつキテええ」

周りで他のセンパイたちがなんか言つてゐるみたいですが、それが気にならないくらいにただただわたしの中に入つてゐるこのおつきな太いものだけに集中しています。ずんずんつて入つてきて今にも写生しそうな熱く滾つたオスの象徴。

「あああんん、ヤバイ、ヤバイイイイ、イッちゃう！セイナイッちゃつてりゅううううう！」

ビクンビクンと快感の津波が下半身から全身を襲つて、ボカボカ温かい絶頂の快楽がわたしを溺れさせちゃいます。

「うおおおお、やべえ。セイナのマンコがキュンキュン締まつてやがる。すげえつすよ」

そういうながら絶頂で弱くなつたわたしの奥底を容赦なく突き上げて、リヨーくんのたくましさをわたしの中に刻み込もうとします。

「ひやあんつつああつ・やあ、今イッたばかりでえええ弱いのおつおお！しょこしょこだめええ！」

「おら、もつと締めろや。オレはいつてねーぞ」

「はああんんつ、ひやいいい！がんばりましゅうう！」

口でそういうつたものの、もう全身の力が抜けてぜんぜん力が入りません。ただ、下半身から来る無限の快感だけがわたしの全部みたいになつてます。

「うおおお、セイナいいわ！」

そう言うとともにリョーくんの男の部分が激しくわたしの中でのたうつようにビクビクと震えて、熱いチンポから情熱的なザーメンが吹き出してわたしの中をびゅるびゅるびゅるるるるつといっぱいにします。そのまま、他のセンパイたちがスマホを向けて撮影する中で、リョーくんは床に座り込んで一人でサイコーに気持ちよかったです。コハメの余韻に浸ります。でも、すぐに他のセンパイたちの我慢汁が滴るバキバキ勃起チンポが目の前に差し出されて、わたしは反射的にそれにキスしてしまいます。

やばい、今晚すごいことになっちゃいそう♡

あとがき

今回も楽しんでいただけたでしょうか。今回はオタクデイストリやコミュ障デイスりがたくさんありました。マゾ的に楽しんでいただければありがたいです。最後に少しだけフォローを入れさせてください。

セイナは実際そこまでコミュ障ではありませんし、多くのコミュ障と言われる人々は単純に経験不足で慣れていないだけだとおもいます。作中で表現されるキムラ先輩のコミュ障克服トレーニングは実際に私が体験した自己啓発セミナーのカリキュラムをもとに作っていますが、何が問題かわかりますよね？わからぬあなた、詐欺とか新興宗教とかブラック企業とかに引っかからないように要注意です。それっぽいことを言われて納得してセイナのようなヤリマンビッチになっちゃうかもしれません。

この問題は相手の立場になつて考えるという「見もつともらしいことを言いながら自分自身の立場を忘れる」ことを暗に要求しているのです。つまり相手の立場に立つて考へて相手のために行動させようとする一方、こちら側の意見も権利も考えずに行動しろってことですね。顧客のためにとか、会社のためにとか、組織のために、教祖のためにとかは状況次第では考へる必要がありますが私達自身の立場を忘れる口実にはならないはずです。なのにすり替えられて、私達の主体を消す理由にされるとしたら、そんな組織は危険なので近づかないほうがいいです。セイナのようにならないために注意しなきやいけないってことですね。

いまでも明示しなくとも寝取られ系の作品ではこらへんは意識してきましたし、今後も多分ヘンタイオジサンの作品では少なからず意識しますので読者諸氏も、ヒロインのように寝取られないよう注意してくださいね。キーワードは主体変容です。「オーケのチンボに負けるはずがないだろ！」つとイキつていた女騎士も主体変容すると「オーケチンボ最高なのーーー」とヨガつてしまします。創作と違い現実の私達は私達自身がいかに弱い存在で有るかを理解しますので理解しているがゆえに潰れないよう生きていきましょう！柄にもなく長いあとがきですみませんでした。